西南学院大学　国際文化論集　第30巻　第２号　133－147頁　2016年２月

半島・汀・松原

── 西南大の地形学をめぐる２つの講話 ──

松　原　知　生

以下の２つの小論は，本学のチャペルおよび汀寮で行なった講話の原稿に若干の加筆修正をほどこしたものである。2014年６月26日に開催されたチャペルでは，「キリスト教とアート」という週テーマの枠組の中で話す機会をいただいた。他方，汀寮での講話は，2015年10月５日，十月寮会において行なったものである。まったく異なる機会に異なる目的でなされた２つの講話であるが，いずれも本学の自然上の立地や建築的な形状を起点として，それらがもちうる文化的・思想的な意味や価値の可能性に論及した，いわば西南大の地形学（トポグラフィー）をめぐる考察をなしているという点では，図らずも共通している。どちらも短く断片的なものではあるが，日頃は無意識に身を置いているキャンパス空間の魅力を改めて意識し理解を深めるための手がかりとして，個人的な備忘も兼ねて，ここに掲載させていただくことにする。

１．古きを囲みて ── 温故知新の美学

今週のチャペルのテーマは「キリスト教とアート」ということで，私はイタリア・ルネサンスの宗教画について研究していますので，それにちなんだお話をしたいと思います。ただし，私は最近，日本の骨董文化についても興味をもっており，最近，骨董についての本まで出してしまいました（拙著『物数寄考 ── 骨董と葛藤』平凡社，2014年）。本日は，キリスト教アートと日本の骨董という，一見関係なさそうこの２つのテーマを結びつけながら，西南大のキャンパス，特にその建築のかたちや地形がもつ意味について考えてみたいと思います。

私が現在研究しているのは，ご覧のような，ちょっと変わったタイプの作品です（図１）。ルネサンス期のイタリアでは，中世の古いイコンを中心にはめ込んだ，こ

うした作品がしばしば制作されました（この種の作品を「絵画タベルナクルム」と呼びます）。古い絵の周りを新しい絵で「額縁」のように囲むことで，古い絵がもつ神秘的なオーラが増幅され，見る者へと強く訴えかけてきます。他方，現代日本を代表するアーティストである杉本博司は，大の骨董マニアとしても知られ，たとえば《時間の矢》（1987年）という作品では，鎌倉時代の仏舎利容器という古美術をいわば「額縁」として，その中に自分の撮影した写真作品をはめ込むという，これと類似した試みを行なっています。このように，古いものと新しいものが互いを取り巻き，共存し，外から内から相互に支え合っている，古美術でも現代アートでもない不思議な在り方に，私は強く惹かれます。

図１　ソドマ《絵画タベルナクルム》1530年頃，シエナ，サン・ドメニコ聖堂

古いものが新しいものの創造をはぐくみ支えるというこのような現象は，近現代日本の芸術や文学の世界にしばしば見られます。たとえば，世界的に著名な２人の現代美術家，上述の杉本博司と村上隆は，このところ骨董に没頭し，そこから創作上のさまざまなインスピレーションを得ています。また，評論家の小林秀雄は，戦中から戦後にかけて骨董に夢中になり，古いやきものや勾玉を直接「いじる」ことで，歴史についての洞察を深めました（図２）。こうした古物はささやかな断片である方が，それに触れる者の想像力をいっそう強くかき立てる，と小林は述べています。打ち捨てられたやきもののかけら，陶片を拾い集め，それを制作の糧としたのが，陶芸学者にして陶芸家でもあった小山冨士夫です（図３）。10万点にのぼる陶片を拾い集めた小山は，陶片の方が完器（キズのない器）よりもはるかに美しい，という逆説にたどり着きます。古いやきものの断片を手のひらにのせて包みこむと，その触感や重さが，新しい創造性や想像力を呼び覚ましてくれる，と彼らは言います。古きものを手のひらで温め，体感し，そこから新しきを知る ── 文

図２　古唐津茶碗をいじる小林秀雄

図３　陶片コレクションをいじる小山冨士夫

字どおり「温故知新」の経験です。

私も彼らのまねをして，しばしば古いものを見つけては拾い上げ，身の回りに置いておきます。たとえば，これ（図４）は，江戸時代から明治時代にかけて西新界隈で焼かれた高取焼のすり鉢のかけらですが，大学のキャンパスで拾ったものです。またこれ（図５）は，大学に隣接する元寇防塁のところで拾ったものですが，同じ学部の考古学者である伊藤先生に見ていただいたところ，弥生時代の土器のかけらだということが分かりました。

このように，西南大のキャンパスとその近辺には，さまざまな歴史の断片が散在しているのですが，実はこのキャンパスそれ自体，古いものを囲む「額縁」をなしています。それは，若い皆さんの学生生活を環のように囲む「環境」であると同時に，その中に古いものも一緒に包み込み，皆さんがそこから新しい力や価値観を引き出すための，温故知新の創造的な空間ともなりうるのです。一体どういうことなのか，ここでは具体的な例を３つ挙げて説明してみましょう。

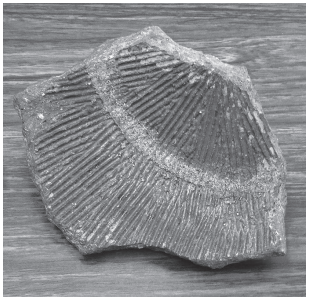

図４　高取焼のすり鉢の陶片

図５　弥生土器（高杯）の陶片

図６　１号館に囲まれた元寇防塁

皆さんもご存じのように，１号館の中庭には，キャンパス構内から発見された元寇防塁が復元されて展示されています。キャンパス内に鎌倉時代の防塁が展示されている大学は，日本中探しても，西南以外にどこにもありません。このような貴重な遺跡を，１号館が「額縁」のように取り巻き，包み込んでいるわけです（図６）。ただ，これが人通りの少ない１階の，薄暗い場所に身を隠しており，皆さんからあまり注目されていないのは，やや淋しいことです。ついでに言えば，１号館のもうひとつの中庭は，もともとは何かアート作品が設置されることになっていましたが，今ではエアコンの室外機によって占領され，殺風景な空間になってしまっているのも，やむを得ないとはいえ，やはり残念なことです。

２つ目の例は，キャンパスの中で最も古い建物である大学博物館です。著名な建築家ヴォーリズの設計により，もともと学院本館として建てられたこの建物は，福岡市の有形文化財にも指定され，それ自体でキリスト教アート作品となっています。そして，東キャンパス全体が，この建物を中心に形づくられ，その周りを「額縁」のよう

図７　大学博物館を囲む東キャンパスの建築群

に囲んでいるのです（図７）。大学院やコミュニティーセンター，最近では本館が，レンガ造りの博物館の建築様式を踏襲しつつ，コンクリートの打ち放しという現代的な技法も併用した，古いと同時に新しい外観で統一され，まさに温故知新を体現した空間になっています。古いものが「核」となり，その周囲に新しい空間の誕生と形成を促した一例といってよいでしょう。

図８　大学博物館の木の階段

ところで，博物館が古いものを収める空間であることは当然ですが，温故知新というテーマとの関連で私がとても好きなのが，博物館の木の階段です（図８）。百年近い年月，多くの先輩たちが上り下りを繰り返すうちに，表面がすり減って丸みを帯び，何とも言えない味わいが出ています。骨董や古民芸の世界では，こうした味のある木の状態を「とろとろ」と表現しますが，私たちもこの摩滅した「とろとろ」の丸みに手で触ることで，学院の歴史そのものに直接触れることができるのです。

この階段が時間によって自然に生み出された作品であるとすれば，ここでは最後に，

やはり自然が生み出したアート作品といってもよい例として，キャンパスに生えている松の樹を挙げておきたいと思います（図９）。

西南大をはじめ百道地区に生えている松はもともと，初代福岡藩主・黒田長政が1618年以降，防砂と防風の目的で近隣の武士たちに植えさせたもので，かつては「百道松原」を形成していましたが，現在では多くが伐採され，立派な松がこれだけたくさん繁っているのは，このキャンパスと百道小学校の校庭だけになってしまいました。

盆栽のように自由自在にうねうねとうねる松は，たいへんに芸術的であると同時に，その姿はややコミカルで，笑いを誘うところがあります。他方，夜のキャンパスを通りかかると感じられるように，夜の松の姿はどこか神秘的で，畏怖の念を抱かせずにはいません。このような両義的な性格をもつ松は，日本では古くから，神が影向（ようごう）して宿る，聖なる宿り木つまり依代とされてきました。実際，宗教的な空間でもある能楽堂の舞台背景（鏡板）には，必ず老松が描かれます（図10）。また古来，松の樹が落とす影（松陰）は，その下

図９　西南大キャンパスの松

図10　住吉神社能楽殿（福岡市有形文化財）　提供：福岡市

に休む者を守ってくれる，神聖な力をもっていると信じられてきました（図11）。

ここで最初にお見せした絵に戻りましょう（図1）。この絵が，古くて神聖なイコンを周りから取り囲んでいたように，このキャンパスもまた同様に，黒田長政がつくらせた松原という歴史ある場，神聖な空間を包み込み，私たちに伝えていると言えるのではないでしょうか。そして，キャンパスという環境の中で学ぶ皆さんも，このような古くて神聖な存在と共存し一体化しているわけです。

かつて百道一帯は，白砂青松の日本的な風景が広がっていました。学院創設者のドージャー先生は，松の樹々が影を落とす静かなこの場所をわれわれの学び舎の地として選ばれ（図12），さらには百道の浜辺で洗礼を与えられました（図13）。かつての松原も砂浜も残念ながら失われてしまいましたが，その古い「面影」を，このキャンパスは額縁のように囲んで守り，今に伝えているのです。

西南大のキャンパスを思い浮かべるとき，私はいつも「半島」をイメージします。松の生い茂る砂浜

図11　伝趙孟頫《松陰高士図》台北，国立故宮博物院

図12　学院創立当時の百道松原（右端にドージャー先生の姿が見える）

図13　百道の浜辺で洗礼を授けるドージャー先生（背後は能古島）

の広がる小さな島。しかし，絶海の孤島あるいは象牙の孤塔ではなく，「半ば」島であるような場所，つまり，社会とつながりつつ同時に独立をも確保した，学問と文化の場。それを成り立たせているのが，このキャンパス空間なのです。

福岡には糸島や志賀島など，古くからの貴重な文化財が今も残る魅惑的な半島が多数存在しますが，さまざまな古いものをゆるやかに取り囲み包み込むこのキャンパスもまた，皆さんにとって，過去と未来の「半ば」に位置する「半島」，古きを温め新しきを知るための活気ある場となることを，願ってやみません。

２．汀の松，あるいは汀で「待つ」こと

今回は，皆さんがお住まいの汀寮にちなんで，「汀」についての話をしてみたいと思います。いろいろな話題に触れますので，うまくいくかどうかは分かりません。

水際や波打ち際を意味する「汀」というこの字の成り立ちは，さんずいに「丁」で，「丁」は打たれた釘が平らになった様子ですから，「水が平らになる場所」という意味があるようです。「みぎわ」とも「なぎさ」とも読むこの漢字，私は以前からなぜかとても好きで，愛着のある文字です。

私たちが今いるこの場所がかつて汀であったとは，なかなか実感しにくいかもしれません。特に，1980年代に海岸線が埋め立てられ，百道浜と「よかトピア通り」ができて以降，汀はすっかり遠ざかってしまいました。

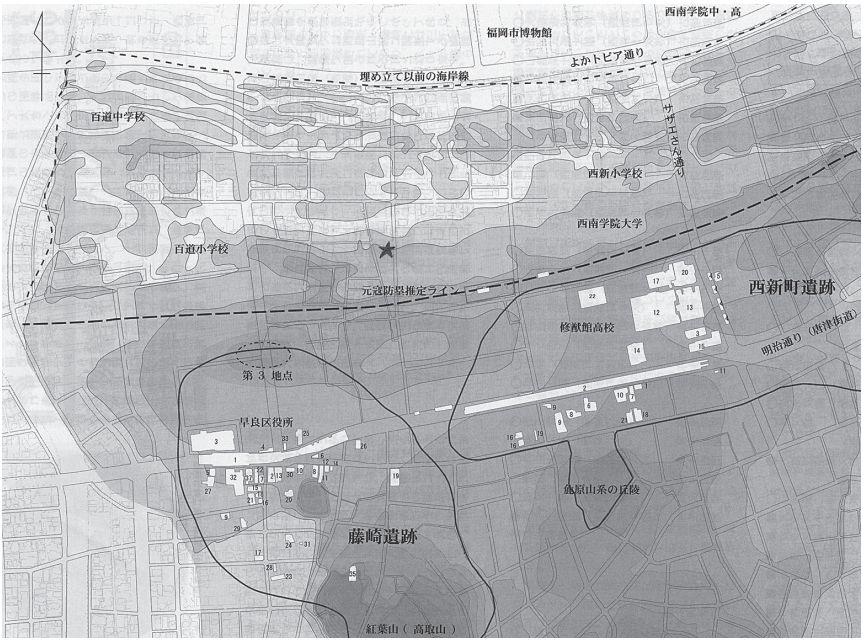

図14　西新・藤崎周辺の弥生時代遺跡と砂丘の復元図
（福岡市博物館「企画展示解説」436号より転載。★印が現在の汀寮の位置）

ここで，時代を一挙に弥生時代までさかのぼってみましょう。弥生時代のこのあたりの砂丘の様子を示した地図（図14）をみると，汀寮の立つ場所が当時，水辺に広がる入り組んだ砂丘のただ中に位置していたことが分かります。実際，明治通りから汀寮に向かって南から北に歩いてくると（今朝もこの道を歩いて大学まで来たのですが），まずなだらかに下り坂が続き，大学グラウンド南側の通りまでやや上った後，もう一度なだらかに下降して汀寮の前を過ぎ，さらに少し上り坂になって，よかトピア通りへと続いていることが分かります。このような微細で複雑な道の起伏は，この図に見られる砂州の起伏と正確に対応しており，かつての入り組んだ洲浜の地形がアスファルトの下に今もなお残っていることに気づきます。こうした太古の地形の痕跡から，汀寮のあたりのかつての風景，潮の満ち引きによって砂州が水際に見え隠れする様子を想像するのも面白いでしょう。ちなみに私は，汀寮の近くの工事現場で弥生土器のかけらを拾ったことがあります（図５）。このあたりの汀には，弥生時代から

人々が住み着いていたのです。

古いものの痕跡や断片といえば，西南で学ぶ皆さんにとっていちばん身近にある歴史の遺物は，体育館裏手やキャンパス内に保存されている元寇防塁（図６）でしょう。これもやはり，かつてこの場所が汀であり，敵の上陸を直前で防ぐ，まさしく水際作戦のための場所であったことを示しています。学内に鎌倉時代の防塁が残っている大学は全国を探してもどこにもなく，西南大が歴史的な場所に立っていることが分かります。

さらにもうひとつ，汀寮のあたりがかつて本当に汀であったことを示すものがあります。それは松の樹です（図９）。実際，寮の敷地内（南端）にも，また，皆さんが大学に行くために毎日通っている弓道場の裏手の空き地にも，かつて浜辺で潮風に吹かれていた太く立派な松を，今でも見ることができます。西南大のキャンパスでいちばんの魅力は，便利な立地でも，おしゃれな校舎でもなく，学内に残るこの松林であると，私は思っています。私は美術が専門なので，芸術家の方に学内を案内する機会が時折ありますが，多くのアーティストの方々が，キャンパスの松の見事な枝ぶりを見て感嘆の声をあげます。

とはいえ，先ほどお話した弥生土器も元寇防塁も人が作ったものですが，松は自然の植物ではないか，歴史や文化とどんな関係があるのだ，と思われるかもしれません。しかし，学内に繁る松は，海辺の砂から勝手に生えてきたのではありません。これは，初代福岡藩主の黒田長政が江戸時代の初め，海風やそれによって巻き上がる砂を防ぐために，近くに住む武士たちに植えさせたものなのです。ご存知の通り，「福岡」という地名は黒田長政がつけたものですから，学内の松は，福岡の町ができた当初から生えているといっても過言ではありません。

バンド「チューリップ」の元ボーカルで本学出身の財津和夫さんは，以前何かのインタビューで，西南大はその松の樹の多さから，かつて「松原大学」とよばれることもあった，とおっしゃっていました。実際，このあたりはかつて，「百道松原」とよばれる広い松林だったのですが，明治以降，近代化が進むと切り倒され，かつての松原の痕跡は，西南大や西新小学校，百道小・中学校などにわずかに残るだけになってしました。

ところで，私こと松原も，汀寮ならぬ「汀」に住んでいます。それも「松原」のすぐ近くです。今年の春，福岡市の西の果ての今津というところに，海まで歩いて３分

図15　筆者の自宅内（今津長浜貝塚）より出土した貝殻

の土地を買い，家を建てました。造成工事をしている時，敷地内で貝殻を見つけたのですが（図15），これは縄文時代の今津長浜貝塚の名残です。また，今津には福岡市内で最大の（ということは日本で最大ということですが）元寇防塁の遺構があり，200メートルにわたって続いています。さらに，その今津の防塁のある長浜海岸には，全長３キロの美しい松林が広がり，これも市内では最もよく保存された松原だと思います（図16）。

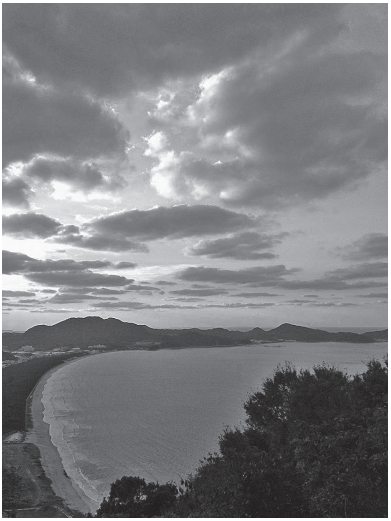

図16　毘沙門山の頂上より今津と長浜海岸（左）および唐泊（右奥）を臨む

このように，この汀寮と，私の住む今津の汀は，遠く離れてはいますが，原始時代の遺物，元寇防塁，そして松原と，さまざまなものでつながっていることが分かります。汀とはいわば時の断片が打ち上げられる境界線であり，こうした過去の歴史の存在が，博多の街をぐるりと取り巻いているわけです。

さて，ここで博多という地名について少し考えてみましょう。博多の語源をめぐっては多くの説があるようです。私は個人的には，「ハコカタ（箱潟）」，つまり「箱のようなかたちの潟」から来ているのではないかと思っています。しかしここではこれとは別の，より有名な説を紹介してみたいと思います。それは，博多はもともと「ハ

図17　今津・毘沙門山の山頂に建つ毘沙門堂

クカタ（泊潟）」だったのではないか，という説です。つまり，多くの船，特に大陸と日本の間を行き交う船が停泊していた水辺，という意味です。

実際，私の住む今津よりもさらに西，糸島半島の先端に近い場所には，今も「唐泊（とまり）」という地名があります（図16）。これは，博多の港を出て「唐（から）」つまり中国に向かう船が，ここに一度「泊まり」，出帆するために適した風が吹くのを待った港です。言い換えると，博多（＝泊潟）も唐泊も，旅人がいったん停泊し，汀で出発を「待つ」ための場所であったことが分かります。

ところで，博多の汀で何かの到来を「待った」人の代表格といえば，臨済宗の祖で日本に禅宗を伝えた栄西（ようさい）禅師が挙げられます。栄西は，日本でいちばん古い禅寺・聖福寺を博多に建てるとともに，中国から日本に初めてお茶をもたらした人としても知られています。その彼は若いころ，博多湾と玄界灘を眼下に臨む今津の毘沙門山に今も残る誓願寺に住み，布教と執筆に励みながら，十数年もの間，中国から一切経（大蔵経）が到来するのを，来る日も来る日も待ったそうです（図16，17）。

汀に「泊まって」何かが到来するのをじっと「待つ」。その姿は，砂に根を下ろして風に揺られる「松」を思わせるものがあります。「待つ」ことと「松」の組み合わせはもちろん，単なる語呂合わせや駄洒落ではありません。ご存知の通り，和歌の世界では「松」は「待つ」の掛詞でした。百人一首の有名な歌に，「たち別れ　いなば

の山の　峰に生ふる　まつとし聞かば　今帰り来む」という在原行平のものがあります。自分は京の都から遠く離れて因幡の国（現在の鳥取県）に赴任するが，その山の峰に生える松ではないけれども，あなた（妻？恋人？）が「まつ」と言ってくれるなら，すぐに戻ってきましょう，というほどの意味です。

他方，室町時代の世阿弥の作とされる能『松風』にも，やはり同じく，在原行平と松が登場します。行平が須磨の地に流されている間，ひととき寵愛を受けた愛人である松風が，都に戻ってしまった行平を「待つ」あまり，死後に亡霊となって現れ，浜辺の松を行平と思い込んですがりつき，狂おしい舞を舞ったのちに姿を消す，という悲恋のストーリーです。

これらは恋人を「待つ」ことを「松」に掛けているわけですが，日本では古来，松はより神聖な存在，つまり神の到来（これを「影向」と言います）を「待つ」ための宿り木，つまり依代でもありました。能舞台の背景（鏡板）に大きな松が描かれているのは（図10），能が本来，単なる演劇ではなく，神を招き入れるための宗教的な儀式だったからです。また，今ではほとんど見られなくなりましたが，新年に玄関の前に置かれた門松もまた，新しい年の神の到来を「待つ」，そして家に招き入れるための依代だったわけです（ちなみに年末の大掃除にも，家の中を浄めて年神の到来を待つという，宗教儀礼的な意味があるように思います）。

このように，「松」に掛けられ喩えられる「待つ」ことは，日本の文学や芸能，さらには宗教の根幹をなす，重要な行為でした。これに対し，哲学者の鷲田清一氏は，慌ただしく毎日が過ぎる現代，特にケータイやスマホの普及以後，私たちは待つことを忘れてしまった，と述べています（鷲田清一『「待つ」ということ』角川選書，2006年）。

私たちの日常だけではありません。大学を取り巻く昨今の状況もまた，大学とは本来，成熟をゆったりと「待つ」場所であったことを忘れて，性急に研究成果を出すことばかりを問題にしています。さらに現在，「役に立たない」（「金にならない」とほぼ同義です）文系の学部を廃止・統合することが国立大学に求められています。これは，財界の要請に応えうる実践的な知識と即戦力をもった学生を育てること，つまり簡単に言えば「金になる人材」を量産することが，大学の社会的役割として「期待」されているためです。

しかし，何かの成果を期待することと，真の意味での「待つこと」は違う，と鷲田

氏は述べ，後者を「待機」とよび，「期待」からは区別しています。

鷲田氏によれば，期待というのは，常に時間の枠内に囚われています。過去において何かを期待した結果，現在の喜びや落胆が生まれる。また他方，現在がもつ意味や重要性は，未来への期待が実現されるかどうかで測られる，といった具合です。それはどうしようもなく時間の内部に「閉ざされた」行為です。

これに対して「待機」とは，「何かを待つ」のではなくただ「待つ」という，目的（語）のない状態であるといいます。つまり，待たずして待つ。まるで禅問答のようですが，それは，時間の必然的な流れに閉ざされたかたちで未来を期待するのではなく，いつか偶然到来するかもしれない未知のものに向けて，あるいは時間の外に向けて，自分を「開かれた」状態に保っておくことを意味します。言い換えれば，そわそわしながら今か今かとチャンス「を」待つのではく，逆に機「が」熟するのを静かに待つ，という待ち方です。

もしかすると，ちょうど育児がそのようなものなのかもしれません。子供の今にお金をかけて将来に何かを期待するのは，時間の枠組に閉ざされた投資でしかない。過剰に何かを期待するのではなく，とはいえ諦めて放置するのでもなく，両者のはざま，子のかたわらで，偶然がもたらす変化に目と心を開きながら，子を「育てる」のではなく，子が「育つ」のを待つ，ということです。これが本当に難しいのですが。

さて，ここで汀に話を戻しましょう。松が「待つ」ことの比喩であるとすれば，汀は皆さんが学ぶ大学という場所の比喩とみなすことができるかもしれません。つまり大学とは，学校と社会，教育と仕事，子供と大人の世界がゆるやかに隔てられながら混じり合う，浜辺のような境界領域なのです。20歳を過ぎて「もはや」子供ではないが，しかし自分で稼いでいないので「いまだ」大人ではない……この「もはや」と「いまだ」の間は，通常は中途半端な状態として否定的に語られますが，この宙吊りの状態こそが，大学だけがもつかけがえのない魅力であると私は思います。

そして，そのような「汀」としての大学で「待つ」とは，企業や社会など他人からの期待や要請に性急に応えようとすることではなく，かといって，あせって自分探しや自己分析をすれば「本当の私」なるものがすぐに見つかると期待することでもありません。それは，あわてて「何か」になろうとして，自分を特定の可能性の中に閉ざしてしまうのではなく，偶然や未知の可能性に対して，自分を常に「開かれた」状態に保っておくことなのではないでしょうか。

これにちなんで，最後に漢字の起源をもうひとつ紹介して，話を終わりたいと思います。「松」という字は木偏に公と書きますが，公の「ハ」は通路や開かれた状態，「ム」は場所を指します。松は葉が細くて間が透けているだけでなく，松の樹はたくさん生えていても鬱蒼と密集せず，松林の中はとても明るいことで知られています。思い思いに幹をねじらせつつ，互いに邪魔しあうことなく葉を青々と茂らせ，開かれた場所で自らをも開き，何かを待つともなく待っているような汀の無愛想な松の姿は，案外，多くのことを語りかけてくれているのかもしれません。